

前回は、掲載図のレーコロプイラ(Leicoopyra)名を持つ「激流」↓「有名な激流」の意味)で、文化四年(一八〇七年)に、近藤重蔵の乗った丸木舟が転覆破船し、二〇〇間(約一八〇)ほど下流に流され、御朱印(朱印を押しした公的文書の敬称)まで濡らすという有名なエピソードなど、ハルシナイから上流での丸木舟の転覆事故を紹介した。しかし、これらは、上川調査の紀行文に掲載された一部で、丸木舟転覆事故の氷山の一角であったと推察される。

今回は、当連載⑤の「ハルシナイと神竜頭首工」でも紹介した、アメリカ人で開拓使御雇外人の地質学士兼鉱山師長のライマン(Benjamin Smitlyman)のカムイコタンの記事を紹介する。ライマンは、ハーバード大学修了後、ドイツの鉱山学校で鉱山学を学び、ペンシルベニア州やインドで

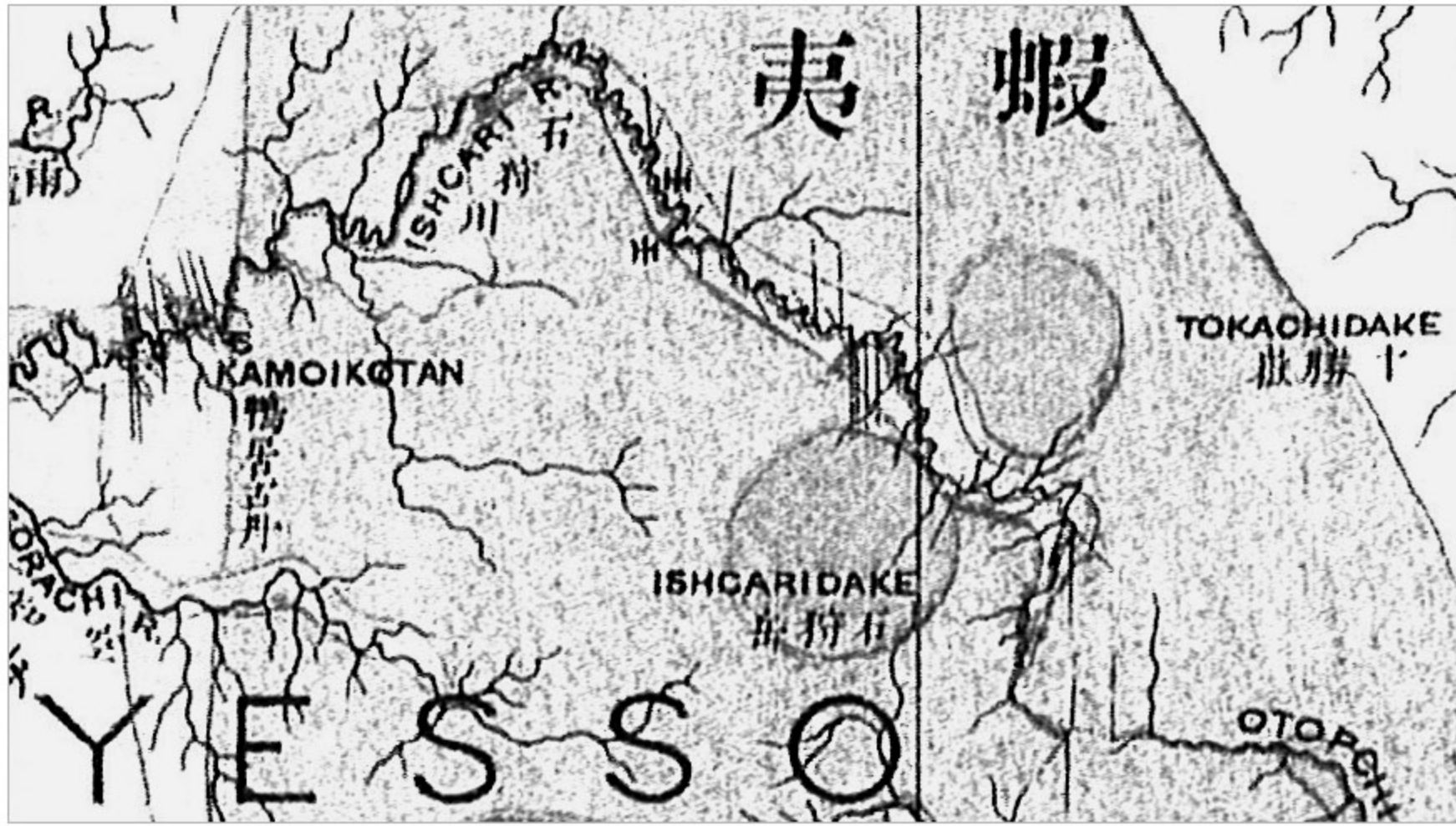
石油調査を終えたばかりで、明治六年に開拓使に招聘され、明治九年に内務省に移るまで、全道の地質・鉱物調査を勢力的に実施、多くの鉱山技術者を育てた。カムイコタンの記事の一部でも分かるが、その記録は実に詳細で科学的で多岐にわたるもので、そのスケールの大きさに驚かされる。

さて、ライマン一行は、明治七年六月十七日、札幌の豊平川を出発、石狩川を遡り、その水源から十勝の音更川上流へ山越えし、音更川、十勝川を下って太平洋岸の大津に八月一日に到着している。

断章 旭川のアイヌ語地名研究

81

高橋 基



明治9年 ライマン作『日本蝦夷地質要略之図』(部分)



ライマン一行が、途中の支流を調査しながら、鴨居古丹(ラママン氏北海道記事の表記)には、七月十一日に到着した。カモイコタンだけでも長い記事なので、これまでの記事に関連した事項のみ紹介し、他は割愛させていただく。

「七月十一日、土曜日(前略)当鴨居古丹ハ、急灘及ビ狭隘ノ山逕ヲ以テ、中川ト上川ヲ分断スル所ナリ。然レドモ、一里ニ足ラザル程ノ間、只渦巻ク如キ、急灘アルノミニシテ、瀑布トテハ、決シテナシ。余輩ハ其急灘ノ下極ヨリ四半英里(註・約四丁)許上流ナル、一ノ平坦ナル荒蕪地ニ露営ヲトセリ。(後略)」

七月十二日、日曜日―当日午後、余輩露営ヲ鴨居古丹急灘ノ下端ヲ距ル四半英里ノ上流ヨリ、其上端ナル「ハルシナイ」ニ移セリ。其ノ距離ハ一英里(十五丁)ニシテ其方向ハ正東ナリ。天幕及ビ旅具ハ、アイヌニ負セテ運搬セリ。彼等ノ荷物竝ニ米噌ハ、既ニ其前ニ送り置キ、剗舟ノ良キモノハ急流ニ向テ曳上セタリ。鴨居古丹二ハ、一ノ瀑布ナク只数多ノ断岩起伏セル一大急灘アルノミ【註・松浦武四郎の『石

狩日誌』には、滝の絵と、文中には滝がある」と書いている。それに対する非難である【(後略)】ライマン一行は、翌十三日、丸木舟十一艘に四十八人のアイヌの人たちと、ライマン等総勢五十六人で、ハルシナイから上流へ上って行ったのである。

左写真、明治九年五月十日に出版されたライマンが作成した、『日本蝦夷地質要略之図』の石狩川の鴨居古丹より上流の部分図である(一三〇%拡大)。これは縮尺二〇〇万分の一の北海道地質図である。日本の地質図としては、最も古いものといわれ、単に北海道開発史上のみならず、近代日本科学史上でも重要な資料の一つとされている。因みに本図発刊日である、五月十日は、平成十九年に、「地質の日」と制定されたのである。また、図中に七色に色分けした「石類憶測之図」(PROBABILE SECTION OF THE ROCK GROUP)の柱状図があり、そこに、「鴨居古丹石類(化石ヲ含マザル変形石力)」が記載されている。平成十九年に、神居古潭が、「神居古潭溪谷の変成岩」で「日本の地質百選」に選出される。その記念すべき出発点を築いた地質図である。

アイヌ語地名研究会幹事) ※毎月第1週号に掲載します